



特別
イ 4
3163
66(3)





秋仙二葉抄 下

源宗^{ニキ}于朝臣 左

秋仙傳云、式部卿本康親王、一男仁明天皇孫也云、三光院殿以
 説云、光孝天皇、孫一品式部卿是忠親王、子也云、大和物語、宇多
 院始、花より、らかり、多、以南、漢、入、き、ら、れ、初、也、あ、り、す、り、く
 新、し、く、も、や、ら、り、而、系、始、か、し、宗、中、さ、さ、か、り、り、て、宗、于、り、介
 あり、南、流、拾、芥、抄、云、四、条、北、壬、生、西、是、忠、親、王、家、云、か、け、り、れ、だ
 宗、于、朝、臣、ハ、三、光、院、殿、始、り、す、は、く、是、忠、親、王、の、子、と、す、く、ら、秋、仙
 傳、云、寛、平、六、年、正、月、七、日、叙、從、四、位、下、^壬改、姓、為、臣、八、年、正、月、任、丹、波
 權、頭、九、年、十、一、月、廿、三、日、叙、從、四、位、上、^壬延、喜、四、年、二、月、任、攝、津、權、守
 十、五、年、六、月、任、相、摸、守、延、長、三、年、十、月、任、信、濃、權、守、兼、平、二、年
 八、月、任、伊、勢、權、守、三、年、十、月、任、右、京、大、夫、天、慶、二、年、正、月、七、日、叙、四、位

下同年く月卒云作者部類天慶三年六月十日卒云

常盤守の孫みどりも長らぬ今ひしほの色まじりきま

古今春上入御事寛平治時きこの宮より命せよと云る云寛

平八守多帝の年号也きふいの宮への所宮と云ふ云明也云云

是しそふらるすくぬりきよしりかれしむ陽長ありて

万本千草めつらり藤の色とりなりぬるにねい新あめも梅代藤

愛するふかしくも愛するねえし長あはれをよ増きなま

とくゆるとぬれはけちと春とよふそ長は村せるとの秋にねり

ふらりもよとぬまして万本千草ぬりぬれりねえし色まじり

ひもばも余のねえのまへとよふはと常盤と云ふの常盤の

福也世とよ常しありて久しきおのいこなりねば百の夏せぬり久

きまはれ命ぬるはといひ

源信明朝臣 右

前右大辨公忠朝臣は男也公忠のり前も妻一秋仙傳云美

平七年正月十六日補藏人八年三月任左衛門権少尉同

四月一日如田為藏人天慶二年二月任式部少兼四年三月任

大兼五年三月十九日叙従五位下藏人任若狭守十年二月任

備後守天曆二年正月十日叙従五位上治國七年正月任信

濃守天徳二年越後守四年正月七日叙正五位下治國應

和元年十月任陸奥守安和元年十二月五日叙従四位下治國天

祿元年月日卒年六十三一説康保二年十月八日卒云天祿八

六十四代園融院の年号云保六十二代村上帝の年号也

忠しそむかひしあはれも今昔の月と君のさすくも先也

拾遺集巻ノ三ノ初書月六あかきりる花共のりくつうしりる

兼好の徒然草より八月十九日九月十三日の曇宿まの宿清明より八月
月よりそりそり夜とすろくし徒然より曇宿まの宿ハ二十八宿の中
西方の星のけりし徒然の抄ありよく兼好とすしけてあるなり
よるす八月十九日九月十三日の月夜やけりし更なる毎日く
宿八月くく大小あれは年くく遠なるく又曇よりある夜八月
ハ光り倍くくすのの證據もなきなり月よりくく我説すは徒然
より新漢惠帝の代よりありと云く唐の世よりくつてあり
言の月より曇宿まの天寶遺事曰蘇頌與李封掌文誥
玄宗顧念之深也八月十五夜於禁中直宿諸學士既月備
文酒之宴時長天無雲月色如晝蘇曰清光可愛何用灯
燭遂使撤去云云又玄宗八月十五夜楊貴妃と大液池に望ん
て月よりくくあり又今更の月より曇宿まの

○七十二

くもあはれ五行より秋と金と令より金生水と水より月ハ大
陰精するくく水ハ八月ハ秋の中ハ八月の中ハ十五日ハ一月の中
故より八月より曇宿まの事ハ文類聚
第十一歐陽詹既月詩序曰月之為既冬則繁霜木寒夏則蒸雲
大熱雲蔽月霜侵入蔽與侵俱害既秋之於時後夏先冬八月於秋
季始盡終十五於夜又月之中既首於天道則寒暑均取於月數
則蟾兔圓况埃壒不流大空悠悠蟬娟徘徊博華上於昇東林入
西樓肌膚與之疎涼神氣與之清冷云事玄要玄月歌曰月
者水之精秋者金之氣金水性相生五行分其事則知天地間相
感各以類水得金還盛月因秋更清氣類使之然人誰不有情
續古今 月と曇宿まの月なりけり月ハくく曇宿まの月なりけり
新撰 曇宿まの秋なりけり曇宿まの月なりけり
登蓮法師

五代 熙績詩 九十日 秋色今霄已 平分孤光吞列宿 四面斷微雲
衆木排疎影 寒流疊細紋 遙望丹桂心緒正紛々

藤原真風 左

拾芥抄 參議濱成 孫道成 男號院藤太 下総 權大掾 延喜十一相摸
掾從五位下云 細川玄旨 說少濱成 曾孫 永台 孫道成 男云
作者部類 河内大掾 治部少輔云 歌仙傳云 昌泰三年正月十一日
任相摸掾 延喜二年二月九三日 任治部少兼 四年正月九日 任下野
權大掾 十四年四月十二日 任下総 權大掾 清和院 籍云 或說正六上 又一
說下総 權大掾 從五位下 ともいへり

惟とよまると人よせしむゆゆのねもびりしは友なりなり

古今雜上 歌しらびのち之抄 幸へ身風 老累く昔の友ゆりも身

死せ我しひりり 存命 思ひくく 世は思ひのひて 心なるか之けり
もかのかも昔し の友なり 幸へ 誰をうも ちる人よせんと ころのへ
然しそきく 誰し 我の昔し ねたみ かく せそく けと友
とゆりや ちゆゆのねし 昔し とうく ねたみ 友なり ねと友
ねハ 昔 整ふる 不愛の 身し 昔し 是しも 今も 葉色も かの 霞
うら 雲よ あら けと 昔し 川へ 老累く せし 人よ ねたみ ねと
ひり ちゆゆのねし 今ハ 誰と 我が 友と せんと ちゆゆのねし
ちゆゆのねし のも ねたみ ねと 今ハ 誰と せのて けねたみ ねと
とゆゆのねし ねと 友なり ねと 今ハ 誰と せのて ねたみ ねと
ちゆゆのねし ねと 友なり ねと 今ハ 誰と せのて ねたみ ねと
とのつて 或説よ 昔之り 今ハ 誰と せのて ねたみ ねと
今とて せと 今ハ 誰と せのて ねたみ ねと

流るるやめり母等如衆神石橋とかけりて一通縁とひらりと
ありければ衆神小角の命と兼て疾く巖石と運の橋とつ
らら橋のかけや一途より一途小角を怒りゆきて通くす
ふやと責問をねりゆくのか對て云葛城の峯に一言主は
神あり其形甚醜一砂の壘のくめと云ふは疾く出づ橋を
渡らぬが通くすると云是りゆきて小角一言主は神を催促
すといふも一言主神形らるるふくまると和ていひかひらるる小角
大に怒り呪傳の法と行ひゆき葛城へつりて一言主神是り
若し官人の託して小角反逆は志あり早くいひゆき若ぬか
能くゆき人與人いひゆきを憂すせりゆきて四十二代如帝文武
天皇初と下して小角と召すゆき小角をさうしてゆきて
のわり能くぬ故に思信成就せしめてゆきい古事とゆき

け分とゆきりりり小角室の形去追捕するゆきゆきゆきゆき
其母とかけりて獄に下り小角いりゆきゆきゆきゆきゆき
して自ら系解へ有り因縁と有り則文武天皇三年五月に
皇列大鴻い流すゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
と富士山の登るゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
さしてゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
い小角母と録に載てゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
其新書に大抵い元亨新書の改いゆきゆきゆきゆきゆきゆき
二代雄略天皇四年春二月葛城山隔りゆきて一言主は神を
ゆきゆき日本紀古事紀等ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
城山忽見長人來望丹谷面貌容儀相似天皇知是神猶故
問曰何處公也長人對曰現人之神先稱王諱然後應導天

古以和歌稱仙者凡三十有
六人各列朝名臣有出類之
才而遂為後世儀矩其和歌
三十六首遍在人口而諷之
吟之浪蕤陸士平春幸者追
山掃之古風以摸其體制左
志數年乃著於仙二葉抄一
卷其為書也宦只舊典之談
詞章幽玄之辨意領心會而

庭極淵奧開發秘蘊可謂詳
也其切其骨不讀不可知焉
予深賞嘆之况又相知久故
為之跋

御厨子所願正五位下采女正紀宗直

